



Title	学校の勉強なんかしない：男の特権？
Author(s)	高田, 里恵子
Citation	応用倫理, 10(Suppl), 14-23
Issue Date	2018-03-31
DOI	10.14943/ouyourin.10.s.14
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/72181
Type	bulletin (article)
File Information	takada.pdf



[Instructions for use](#)

学校の勉強なんかしない——男の特権？

高田里恵子
(桃山学院大学 経営学部 教授)

最初に、スライドにありますように「女が『学校の勉強なんかしない』という心性（メンタリティー）と無縁な理由」について話していきたいと思います。

まず、教養主義をどのように私がとらえるかということですが、ここではあえて、教養と教養主義というのをほぼ同じように考えたいと思うのです。先ほど蔵田先生のほうから、「教養主義というのは、哲学とか文学とかを通して、自分の人格を高めていくようなこと」というお話がありました。その昔、教養主義の全盛期によく読まれた作品とといいますと、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』がありますし、昭和10年代になると漱石の『こゝろ』などがあり、これらが教養主義的読書の代表的な作品とされています。しかしながらよく考えてみますと、『ウェルテル』は横恋慕する困ったさんの話ですし、『こゝろ』も、主人公が別段いい人なわけではなく、こんなものを読んで人格が高められるか、といった作品です。そもそも人格が高められるといい人になるということでもありません。例えば『ウェルテル』が訴えかけるのは、世間とか道徳、因習を打ち破って自分自身というものをつくる、ということです。『こゝろ』もそうです。悩んで、悩んで、悩みの中から自分というものを発見していく、ということです。

教養って何だろうと聞かれて、それに答えるのは本当に難しいことですが、一つ私が言えそうなのは、『ウェルテル』と『こゝろ』の例を挙げましたように、教養とは「自分というものを持つ」ことであるということです。教養は「自分で考える」、ドイツ語で言いますと *selbstdenken* ということと結びついている。こうした教養は、元は啓蒙主義から出てきていまして、啓蒙主義は「解放」ということに結びついている。解放されて、自分自身をつくっていく、獲得する、ということです。今日は、初めは男子の話が中心になるのですけれども、日本の女子が解放されるのは第二次大戦後です。解放ということなしに、この意味での教養は考えられない、ということが一つ、今日の話のポイントとなります。そこでまず、旧制高校を中心とした教養主義の話をしていきます。旧制高校はまさに教養主義の発祥の地です。

旧制高校は約60年の歴史があります。皆さんにお配りした資料の「引用文章一覧」に、「〇〇年に一高に入学」といったことがいちいち書いてあります。書いていてわれながら本当にいやらしいと思うのですが、この記述でそれぞれどういう人か、どの年代の人か、ということが分かると思います。

題名に書きました「学校の勉強なんかしない」ということについて説明します。旧制高校は、初めは入るのがそんなに難しくなかったのです。しかし入りたいという人がどんどん増えてきたときに、受験競争が厳しくなるわけです。そしてどんな受験であってもある程度は暗記ですから、受験を突破する人というのは多分、暗記力が強い人だと思います。そういったある程度のガリ勉

を経て、旧制高校に入る。しかしその後、自分は単なる秀才ではない、単なる優等生ではない、単なる受験の勝者ではないというところで、自分の殻を破ろうとして、「学校の勉強なんかしない」というスタンスで、いろいろな文学作品を読み、哲学書に接する。それは学校の正課のカリキュラムではありません。これはよく「エクストラカリキュラム」と言われます。



高田里恵子さん

『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』の竹内洋先生や、山崎正和先生、同じく

京都大学の稲垣恭子先生などは、「高等女学校の文化というのは、ハイカラで、ガリ勉とは違った文化である。それに対して旧制高校の教養主義というのはガリ勉文化だ」といったことを言っています。つまり、高等女学校の生徒には初めから勉強なんか求められておらず、「学校の勉強なんかしない」というメンタリティーとは無縁、というわけです。補足して言えば、教養主義はガリ勉文化なのではなく、ガリ勉が基底にあって、それを破っていくという学校文化なのではないかというのが私の見解です。

「学校の勉強の勝者、立身出世の可能性のある者たち」とスライドにあります。当時はまだ、受験の勝者と立身出世は結びついていました。しかし、今は違います。受験の勝者みたいな人は一応いると思います。しかしそれが、立身出世と結びついているわけではありません。就活は必ずしも学歴とは関係ありません。また、就活で勝ったとしても、東芝みたいなことになるかもしれないし、先のことは分からない。ですから、受験の勝者というのは現代にもあるかもしれないけれども、受験の勝者と「学校の勉強なんかしない」というメンタリティーとの結びつきは、今の若い人にはなかなか通じるものではないかもしれませんね。しかしある一定の時代まではあったと思います。例えば大正教養主義の全盛期には、哲学とか文学とか、学校のカリキュラムにはないものを読む。学校の勉強はしないでそれを読む。やがて昭和初期には、いわゆるマルクス主義時代が来ます。そのときにはマルクスの文献を読む、ということです。

教養主義の終わりは1960年代の末ごろだと言われますが、当時は学校の勉強なんかしないで、政治とか学生運動とかにかかわる。あるいは、漫画に没頭するということかもしれません。よく考えてみたら、『若きウェルテルの悩み』より、『あしたのジョー』のほうがよっぽど人格を高めるかもしれませんよ。(笑い) いずれにしろ、学校の勉強なんかしない。そして、私の考えとしては、最後の教養主義というのはいわゆるニューアカではないかと思うのです。そのときは私もつい、分かりもしないくせに手に取ってしまったデリダとかドゥルーズといったものが、「学校の勉強なんかしない」に当てはまっていったのではないのでしょうか。そこが最後でしょう。お若い方々には、学校の勉強なんかしない、学校以外の勉強をすることで自分の殻を破る、といっても、なかなか通じにくいかもしれません。そこに越えられない、深い深い川があるかもしれないというのが心配なのですが、それは後でまた話していきたいと思います。

さて、このスライドに「それは藤村操からはじまった」とあります。約60年の旧制高校の歴史がありますが、1900年前後に「学校の勉強なんかしない」という文化が始まったのではない

かと私は考えています。そもそも、教養主義文化がどのぐらいの時期から始まったかという、1900年ぐらいではないかと言われていました。これは別に私が考え出したことではないです。ただ、1900年前後のことを、ちょっと違う視点から見てみようというだけです。藤村操は、華嚴の滝で投身自殺した人です。1903年5月、彼が一高の1年生のときです。何となく入学してすぐに自殺してしまったように思いますが、そうではありません。もうちょっとで3学期が終わるといふときでした。つまり、1年生の最後です。というのは、当時は6月まで授業があって、9月からが新学期なのです。この1900年前後は、平石先生のご著書の題名にあるように、いわゆる「煩悶」ブーム、すなわち学生が悩み始めた。これも理由があって、日本の制度が固まってきてしまって、立身出世の可能性もそれほどなくなってきた。あるいは、いつ植民地になってしまうか分からないというような日本の危機も去って、そのときに初めて、青年の間に純粹に「苦しむ」「悩む」ということが始まったと言われていました。これもよく言われていることです。また、学校制度も比較的固まってきました。

(旧制) 高等学校という名前になったのが、1894年です。例えば夏目漱石の「落第」という談話があるのですけれども、自分のときにはまだ、学校制度がちゃんとしていなかった、「学校は非常にゴタゴタして、随分大騒ぎだった。それがだんだん進歩して、現今の高等学校になったのであるが」と言っています。そうすると、1900年前後に旧制高校に入った人のころには、受験して入学し、ちゃんと卒業して帝国大学に行くといった制度がほぼ固まり始めたのです。夏目漱石は、あれよあれよという間に何となく帝国大学の学生になったという感じです。それに対して1900年にはもう、完全に学校の制度ができ上がってしまいました。受験制度もでき上がってしまっているという時代でした。

藤村操は「人生、これ不可解」といって華嚴の滝に飛び込んだわけですが、その二、三日、一高の英語の教師をしていた夏目漱石が、教科書も出さなければノートも出さない、予習もしてこないというので藤村を叱った、というエピソードが伝わっています。藤村は学校の勉強というのをそういうふう拒否していたらしいのです。今日は夏目漱石の101年目の命日ですが、そんなことで夏目漱石も藤村操の自殺については随分気にしていたという説もあります。

いずれにしろ、安倍能成、阿部次郎、岩波書店を作る岩波茂雄、野上豊一郎、中勘助など、藤村周辺の一高生がやがて漱石の門下生となり、岩波書店が『こゝろ』を自費出版することによって伸びていきます。同じく、阿部次郎、安倍能成を中心として哲学叢書を出し、それが売れてきて、大正教養主義を先導するわけです。岩波書店は昔は弱小出版社で、それこそまだ大学に就職できていない阿部次郎や安倍能成を使って、現在の雑誌『思想』の前身となる『思潮』を作らせます。もう一度言いますが、大正教養主義というのは、藤村操周辺の一高生がやがて大正中期に大学教師となって本を書いて、それを旧制高校生が好んで読むという、そんな形になっています。

さてここで、「学校の勉強なんかしない」という発言をまとめておきましたので、それをざっと見ていきたいと思えます。

①「昭和18年 一高卒・東大入学組」というのは週刊誌の記事の一部ですが、「学校の勉強をするのは恥」というのが旧制高校の文化であった、と紹介されています¹。そして、尊敬され

1 「学校の勉強をするのは恥」「びりに近い方は、低空飛行をしながら不時着しないでいられるのはなかなか大物だというのである」(「昭和18年 一高卒・東大入学組」『週刊文春』昭和51年9月30日号)

るのは、競馬のブービー賞ではないですけども、ビリから2番目ということです。ビリに近くて、低空飛行をしながら、しかし落ちない——こっちのほうがよっぽど才能がある、ということなのです。学生同士でコンパをしたときには成績が1番のやつは多くお金を払うという形で、「成績が低いほうが大物」という考え方なのです。本当にいやらしいですけども。(笑い)

②の瀧川幸辰氏は瀧川事件で辞職に追い込まれた京大教授ですけども、「大学と教授と学生」という文章を書いていて、そこには三木清の有名な論考「学生の知能低下に就いて」というのが含まれています²。そこに「高文学生」「キング学生」という言葉が出てきます。高文というのは高等文官試験のことで、高等文官というのは今で言えば、財務省に入って国税庁の長官になった佐川某とか、そんな高級官僚のことです。(笑い)「高等文官試験に受かりたい」というのでその勉強しかしないのが「高文学生」です。それと「キング学生」ですが、『キング』というのは大衆向けの月刊誌の名前です。とにかく大衆が読むような『キング』しか読まない学生、ということです。これは、哲学書も文学書も読まない無教養な学生と、高等文官試験の勉強しかしないガリ勉学生を同じものとして批判しているわけです。そして、瀧川教授は「『無駄勉強』のもたらす効果が重要」と強調しています。

もう一つは、昭和の初期に一高生になった高見順さんの『風吹けば風吹くがまま』という自伝的な小説ですけども、そこに佐井という同級生が出てきます。ちょっと読んでみます。

「そうして見たところ病的なのだが、教室へきちんきちんと出席してノートを克明に取り、病室でもこつこつと勉強している。これは病的でない几帳面さ、これも軽蔑と反感を買っていた。そうした佐井を私も皆に劣らず軽蔑し、軽蔑されながらもかまわず自分を通して佐井の弱々しい図太さに、これは私だけの感情かもしれないが妙にいらいらさせられ、時に憎悪さえ覚えさせられた」³

これは要するに、「学校の勉強なんかしない」という同調圧力が、いやらしいまでに強いわけです。こうやって、こつこつ勉強するなんていうのはみんなに軽蔑される。だけどこの佐井というやつは「そんなのへいちゃらだ」という態度を取る。すると、高見順の何重にも何重にも渦巻いた自意識の中で、「この強さがかえってうらやましい」という気持ちになるのでしょうかね。これは本当に、いわゆるエリート校の「学校の勉強なんかしない」という文化を大変よく伝えていると思います。今だって、東大などはどうか分からないのですが、灘高とか麻布とかいうのはきつこうだと思います。このぐらいいやらしい、嫌な学校だと思います……多分ね。(笑い)

大佛次郎は、「しかし一高へ来て、唯、勉強をして学科の点数ばかりを多く得ようと云うなら、向陵の三年は無駄だ」⁴と言っています。この余裕が、高等専門学校……今の専門学校ではありません、今の東京工業大学のようなところを言いますが、この余裕が専門学校にはない、と大佛は言います。東京工業大学は今は、池上彰先生が「教養を高める」などと言っていますけれども……。

2 「世俗的な眼からは怠け者に見える」「自由な学生のみ自己の意志に基く義務として、道徳的責任において勉強する」「『無駄勉強』のもたらす効果」(瀧川幸辰「大学と教授と学生」『現代学生論』(矢の倉書店、1937)(三木清の有名な論考「学生の知能低下に就いて」を含む。三木は「高文学生」「キング学生」を批判))

3 高見順(1924年一高入学)『風吹けば風吹くがまま』(1951未完)

4 大佛次郎(1897～1973)(1915年一高入学)『一高ロマンス』大正5年2月号から大正6年8月号まで『中学世界』に連載

さて、「学校の勉強なんかしない」というのが1900年前後に始まったと言いましたが、そうしたメンタリティーが一体どのぐらいの時代まで存在したのか考えてみましょう。ところで、上野千鶴子さんが前にシンポジウムにいらしたということですが、『以文』という京都大学の同窓会雑誌に上野さんがこんなことをお書きになっています。

「ウエノさん、学生時代は何をして過ごしたんですか、と若い人に聞かれると、そうね、麻雀とセックスね、と答える。覚えたのはこのふたつ、どちらも時間がつぶれた」⁵

上野さんはいわゆる「全共闘世代」だと思えるのですが、この時代は女子にも「学校の勉強なんかしない」という人がいたということです。この話が冊子になったとき、あたかも私が上野千鶴子さんを責めているみたいなので、ここはカットになるかもしれません。(笑い)

「大学で教育を受けた覚えはあまりない。自分が授業に出なかったので、毎回はじめに授業に出てくる学生さんの気持ちがわからない。京大では教師に教える気持ちがなかっただけでなく、学生にも教わる気持ちがなかった」⁶

「こういう教育では異才、奇才は育つが、秀才は育たない。しかも、分止まりが悪い」⁷

私は今、京都大学の自画自賛の言説を集めているのですけれども……。 (笑い)

山中さんがノーベル賞を取ったとき、彼自身は非常に冷静にしているのに、隣で松本京大総長がニヤニヤとうれしそうにしていました。それを見て、「山中さんは京大出身じゃないだろ」と言いたかったぐらいです。まあ、奇才、異才を育てるのが京都大学なのだ、ということですから……。

⑤に中野好夫さんの三高賛歌を入れておいたのですけれども、そこでも「学校の勉強をしないだけではなくて、学校が教育をしない」というのです⁸。これ、本当に「京都大学系」が多いですよ。

⑦の浅田彰さんのインタビューもそうです⁹。「だから、大学に行って授業を受けたという経験がほとんどなくて……」ということです。

それで、私から見たらちょっと若い、⑧の國分功一郎さんと白井聡さん、そのお仲間にもう一人、『勉強の哲学：来るべきバカのために』を書いた千葉雅也さんがいますが、彼らも「学校の勉強以外のものをするのだ」という考えなのではないでしょうか。これは読みます。

「私や白井さんは政治経済攻究会という勉強会サークルに入っていて、大学の授業にはまったく出席せずに勉強していました。そこでマルクスもプラトンもルソーもホブズも読んだ。しかし、このモデルを今の学生に適用することはできません。確かに今の学生はそういう仕方でも勉強するのは苦手です」¹⁰

5 上野千鶴子「人生を変えた日々」『以文』60 (2017年)

6 同上

7 同上

8 「そしてその私にあたかも目から鱗の剥げ落ちるように新しい目を開いてくれたのが、自由な三高の空気であった。詳しく書いている暇はないが、それがやはり徹底した、教育をしない教育、教育を強要しない教育であった。そして真の意味の自発的内発的な好奇心、人間形成への探求精神が、湧然と湧き起るのは、実にそうした自由に溢れた場を措いてないということ、特に声を大にして言いたかったからである」(中野好夫(1903～1985)(1920年三高入学)「教育」をしない教育が一番よい(1958)『文学・人間・社会』(文藝春秋 1976年))

9 「だから、大学に行って授業を受けたという経験がほとんどなくて、教養科目は授業に出ずに試験だけ受けたし、専門のほうはそもそも授業がなかったとか、つぶしたとか……(笑)。だから公式のカリキュラムで勉強した部分はすごく少ないんです」「受験体制下では文部省の決めたカリキュラムにしたがって規格化された知識を一方向的に与えられる。そういう受験のプロセスは適当にクリアすればいいと思うけれども、クリアしてしまったらもうそういう枠組みにとらわれる必要はまったくないわけで、自分で疑い、自分で考えたほうがいい」(浅田彰インタビュー『セリオ』No.12(増進会出版社、1993年4月))

10 「教員は働きたいのであって、働くふりをしたいのではない」『現代思想』vol.42-14(2014年10月)

だから、國分さんのあたりまで、学校の勉強はしないでエクストラカリキュラムで読書会をする、というメンタリティーがあったのでしょう。

そして、「ある世代の教員は、学生に『不良であれ』というようなことを言っている。『授業なんて出るな』と言う人もいます。最低だと思います」と國分さんは続ける。

実際にこういう人がいるのです。ちょっと世代の上の人が、「何か君たち、どうして授業に出るのかな。自分たちで本を読むというのが大事なんじゃないのかな。僕の話なんか聞いたって、つまらんよ」とか言って……想像ですよ。(笑い) そういう感じで、ある時代まで「学校の勉強なんてしない」「大学は教育なんかしない」という雰囲気がたしかにあった。自主自立ということです。それが1900年の藤村操の同級生あたりのところから始まったのではないかと、というのが私の考えです。

ここで、⑪の引用です。那珂博士というのは藤村操の叔父ですがけれども、この叔父も「(操は)学科の勉強はしないで、専ら哲学宗教文学美術等の書を研究していた」と言うわけです¹¹。

それから、藤村操の同級生の安倍能成の思い出記。「『人生に煩悶する』というのが当時の多感な青年の流行になった。それ以来『定められたるを定められたる如くする』のが、真面目ではないという考えから、学校の課業を怠り、自分の読みたいものを読み、自分のしたいことをするのがいいという気分が、私を支配した」¹²それで安倍能成は落第するのですが、学校全体でもそうで、藤村操の同級生が17名、2年生のときに落第してしまったというのです。ちなみに、岩波茂雄は藤村操より1級上なのですがけれども、落ちてきて、安倍能成と一緒にしてもう一回落第して、一高を去ります。では旧制高校は卒業しにくかったかということ、そうではありません。むしろ卒業しやすいのです。

⑬で南原繁が書いているように¹³、実は旧制高校では新しい勉強なんかしないのです。「旧制高校が消えてしまって、日本のエリート教育がなくなった」とすごく悲しむ老紳士たちが多いのですが、でも、「こんな無駄な3年間は要らないのではないか」といって、「旧制高校廃止論」は戦前からずっとあるのです。それが最後の最後、戦争に負けた後の学制改革で実現したというだけで、必ずしもアメリカがエリート教育をつぶしたわけではありません。ですから、本当に、意図して落第しなければ落第しないのです。そして、現在の大学みたいに、点数の高下駄だっただけで履かせて単位を与えてしまうわけです。北海道大学はきっと違うと思いますけれど。(笑い) そんな形で、決して落第しやすいものではありません。落第というのはむしろ、自ら計画しないとできないぐらいです。

では何故、学校の勉強、すなわち「定められたることを定められたる如くする」のは嫌だという雰囲気が出てきたかということ、1900年前後のちょうどこの時期に「詰め込み主義批判」とい

11 「学校の科目は、力を用うるほどの事にも非ずとて、専ら哲学宗教文学美術等の書を研究して居たりしが」(「那珂博士の甥華巖の瀑に死す」『万朝報』1903年5月26日号)

12 安倍能成(1883～1966)(1902年一高入学)「落第と落第の前」辰野隆編『落第読本』(鱗書房 1955年)

13 「正直な話、あの三年間というのは僕も知ってるけど、遊んだものですよ。やる内容といえ、中学校で習ったものを少し手直したような——国語にしても、歴史にしても、漢文にしても。遊んだんですよ。余裕もったということです。そうすると自ずとそこから人間が伸びたという気になった。いい点もあったろうし、悪い点もあったでしょう。ただ、どっちにしても人間をつくる。単位なんかにとらわれずに、もっと自由に人間をつくる。それが教養の目的だと思います」(南原繁(1889～1974)(1907年一高入学)『聞き書 南原繁回顧録』(東京大学出版会 1989年))

うのが流行っていたのです。これと連動しています。だから、詰め込み主義とか暗記だけでは駄目なんだという批判を、もう100年も言っているのです。ただし、エリート教育に関しては詰め込み主義ではだめなんだ、ということです。これからは自主的な人間をつくらないとだめなんだ、ということです。これは、今の文部科学省の言っていることではありません。100年前の話です。大正時代に、例えば成城学園とか成蹊学園みたいな、欧米の自由教育（Liberal education）の影響を受けて、詰め込み教育はだめだという小学校とか中学校が出てきます。しかし、成蹊とか成城というのは安倍首相も出ているようなところでブルジョワ的な学校ですから、ちょっと話が違います。1900年前後の詰め込み主義批判というのは、まずはエリート教育、高等教育の中で詰め込みはだめ、という話なのです。そこで、⑭を見てください。

加藤弘之は帝国大学の第2代総長でもあるのですが、当時の実学主義の盛んなときに、むしろ文学部みたいなものを応援していた人です。にもかかわらず彼は、藤村操が「人生、これ不可解」と華嚴の滝に飛び込んだことを、「十七や十八の少年が、僅かばかりの研究をして、其れで早くも人生は不可解と断じて、あたら有為の身を自ら殺す杯とは、実に寧ろ生意気、否狂気の沙汰たるを免れ得ない」¹⁴と怒っているわけです。加藤は、「詰め込み主義はいけない」と当時の教育者が言っているのがむしろいけない、と主張しています。「これ〔教育は所謂詰込主義では不可ない〕一応甚だ道理の如く思われるが、併し此が抑も謬見と言う可きもので、余輩は何処迄も詰込主義——最も過度では不可ないが、適当に為る時は或程度迄は、却て此主義、換言すれば即ち唯だ学ぶと言う方が宜い」¹⁵というわけです。とにかく、この「詰め込み主義批判」が重要視するのが自主・自律・自修であり、これの基盤となるのは自由です。加藤は、あまり自由過ぎるのもどうか、という意見なのでしょう。

それでもう一つ言っておきたいのですが、戦前に高等教育を受けるということは、現在よりも非常に大きな意味をもっていました。立身出世できるという意味ではないです。そうではなくて、世間や地方の因習的なつながり、家族の縛りといったものから解放される唯一の手段は、東京で、あるいはどこでもいいのですけれども、都会で高等教育を受けるということでした。ですから、当時としては高等教育の意味は、本当に「イコール解放」だと思っていいでしょう。もっとも自分自身を解放する、というような意味です。そしてここで、「あえて文科、文学部へ進学する」ということを取りあげます。これは「学校の勉強なんかしない」という心意気の継続なのです。

もう一度、藤村操の同級生たちに戻りますと、当時はまだ、志望者がもともと少ない帝国大学文科大学、すなわち文学部や、法科大学も全部無試験でした。出世したければ、何と言っても、東京帝国大学法科大学だったわけですが、この法科大学こそが詰め込み主義、ただただ写せばいいという筆記学問や暗記主義の牙城でした。それで、阿部次郎も和辻哲郎もほぼ一番みたいな形で一高に入るのだけれども、あえて文学部に進む。それは、出世主義というか、法学部の筆記学問、暗記主義みたいなものを拒否するというメンタリティーの継続を意味したわけです。

そこで、⑲の引用ですが、安倍能成の思い出です。

「〔阿部次郎の〕同じ組には秀才の誉れ高かった鳩山秀夫があり……」¹⁶

14 加藤弘之「青年と哲学」『成功』第2巻第5号（1903年）

15 同上

16 安倍能成『我が生ひ立ち』（岩波書店 1966年）

鳩山秀夫というのは、鳩山由紀夫のじいさんの弟です。これが空前絶後の秀才と言われていました。兄の鳩山一郎も東大法学部です。にもかかわらず、「賢弟と愚兄」と言われたぐらい、秀夫は秀才だったそうです。

「……鳩山（秀夫）は常に首席で、阿部は二番だったが、阿部は教場ではよく居眠りをして居て、試験勉強もしないで、この席次を失わないのが、皆から羨まれて居た」¹⁷

もちろん尊敬もされていた、ということです。鳩山などは秀才であっても、だめなのです。阿部次郎は、当時としても就職に不利な哲学科を、あえて選ぶわけです。

もう一つ見ていただきたいのが、東大の総長を務めた林健太郎です。彼が一高の教師になって、「自由の孤城に住みて」という文章を書いています。「自由の孤城」というのは一高のことです。一高だけではないのですが、旧制高校の教員の6割が文科、文学部出身で、あとは理科（理学部）です。要するに、林健太郎に言わせると、一高は次のようなところだったということです。

「自己の境涯に生きることを第一義とし、学外においても学内においても地位とか権力とかに対しても何等の志向を持たないことにおいて、曾ての反俗と自恃の伝統が依然脈々としてここに流れていた」¹⁸

だから一高って素晴らしい、と林は言っていますけれども、随分いやらしいところだなという話です。そしてこれは、教養主義の一つの特徴だと思います。「反俗と自恃の伝統」を受け継いで、林健太郎は東大総長になっているわけです。

言っておきますけれども、和辻は東大、安倍能成は京城、阿部次郎も東北ということで、3人も一応は帝国大学の教授になるわけです。そうすると、「学校の勉強なんかしない」ということと、しかし学校にいるという——これは絶妙な位置なのです。（笑い）だからといって、在野の人間になるわけではない。夏目漱石も、「学校の勉強なんかしない」という感じで帝大を辞める。でも、実は学校と分かちがたく結びついている。何と言っても、教科書の定番になるわけです。この絶妙な位置というのが、教養主義において非常に重要である。

さて最後の最後に、やっと今日のテーマの「ジェンダー」が出てきます。

スライドの「女が『文科』に成績主義をもちこんだ」というところを見てください。文学部（文科）では、「学校の勉強」を超えた「才能」が重要、という考え方なのです。そこで、次の引用を見てください。

戦後、文学部に女子学生が進出していきます。東大にも女子学生が入ってきます。私立大学の文学部にはどんどんどんどん女子学生が入ってくるわけです。新制大学発足まもない1950年1月号の『文藝』に辰野隆、中野好夫、高橋義孝の「文科の学生を語る」が掲載されています。

編集部「女の学生は丸暗記するといいますがけれども」

中野好夫（当時、東大英文科教授）「それはあります。こっちが忘れたような冗談まで答案に書いてありますよ。実によくない。だから試験の答案で落第点をつけるのは絶対に

17 同上

18 林健太郎（1913～2004）（1929年一高入学）「自由の孤城に住みて」『移りゆくものの影：一インテリの歩み』（文藝春秋新社1960年）

ない。落第の能力を持っていないのですね。気の毒に」¹⁹

——女ってやつは……ということです。(笑い) そして、当時、東大仏文科の教師を定年退職していた辰野隆が、「先生の言うことはよく聞くし、あれでは落第しっこなしです」²⁰と言います。つまり、女子は成績がいいから東大なり何なりに入ってくる。でもそれは単に学校の勉強をしているだけ——というわけです。今こんなことを言ったら、本当に怒られます。でも私がまだ学生だったころ、「女ってのは結局、語学はできるよね。よく勉強するもん。でも、本当の文学の才能とは無縁なんだ」という考え方というのは実際、けっこう堂々と口にされていたのです。

それで、暉峻康隆氏の有名な「女子学生世にはばかる」と、それを受けた池田彌三郎の「大学女禍論」を最後の引用にします。これは、今やったら大変です。どの大学も一人でも多く女子学生に入ってもらいたいのですから。本当に、いざとなったら(合格の)点数を下げてでも入ってもらいたい、というのが大学の本音です。

暉峻さんは言います。

「昔の文学部は、文学部以外はどうしてもいやだという連中(男子)の集まりであった」。なのに女たちが「学科の成績がよいというだけで、どしどし入学して過半数をしめ」²¹……暉峻さんは続けて「女子は文学部へ来ても、花嫁修業の代わりにしてもらっては困る」なんて言っています。文学部はまさに「学校の勉強なんかしない」という男の領域だったのに、なんたることか、ということなのです。

それでは、女子にとって「破るべきもの」とは何か、その方法とは何か。「学校の勉強なんかしない」ではないわけです。「破るべきもの」というのは世間的な道徳だと私は思います。先ほど上野千鶴子さんの言葉を引用しましたが、上野さんも若い大学生として、「私は世間的な道徳なんか縛られないんだ」というのをやっていたと思います。同じように高等女学校の優秀な女学生たちも、「学校の勉強なんてしない」というメンタリティーはないにしても、「道徳を破っていくのだ」という心意気があった、と私は考えるわけです。たとえば平塚らいてうなんか、そうですよ。平石さんが取りあげていらした『虞美人草』の藤尾もそうだと思います。自分たちを縛っている何らかの道徳を破ってやる、ということです。それが意外と外国語を学ぶということと結びついていた。1927年に岩波文庫が発刊され、どんどん外国文学の翻訳が出ますが、その前は、外国語を知らなかったら読めなかったのです。

たとえば『ウェルテル』を読みたいなら、キャッセル文庫の英訳か、レクラム文庫のドイツ語で読むしかない。この世代の人間にとって外国語というのは、読むために必要不可欠なものなのです。ですから、『虞美人草』の藤尾が小野さんに、平塚らいてうが森田草平に教わりながら外国文学を読むというのは、やっぱり不道徳なことなのです。文学は不道徳なので。そしてなお道徳を破るために、平塚らいてうは森田草平を引き連れて、雪の塩原に逃げていきます。才能ある女にとって、「自分の殻を破る」行為とは、「学校の勉強なんかしない」なんてことではなくて、「道徳なんかには、私は縛られない」ということです。現代では○○○○さんでしょうかね。この部

19 辰野隆(1888～1964)(1905年一高入学)・中野好夫・高橋義孝「文科の学生を語る」『文藝』1950年1月号

20 同上

21 暉峻康隆「女子学生世にはばかる——彼女らの目的は何か」『婦人公論』1962年3月号

分は伏せ字にしてください。(笑い) 終わりにします。(拍手)

蔵田：伏せ字にするかどうかは編集段階で検討させていただきます。(笑い)

女子にとって破るべき殻は何か。戦後の「女子大生亡国論」にもつながりますが、ここでは女性が文学を鑑賞する、芸術を鑑賞するというのはどういうことなのだろうかといった問題が出てくると思います。

続いて小平麻衣子先生から、「〈〇〇鑑賞〉は趣味なのか？ —— 教養の拡張と文学の関係」というタイトルでお話を伺います。